

『老残遊記』試論

樽 本 照 雄

はじめに

本稿は『老残遊記』の構造を明らかにし、作者劉鉄雲の当時の中国社会に対する考えを『老残遊記』の本文より抽出し、最終的に劉鉄雲とその作品『老残遊記』がどういう関係にあるのかを考えることを目的とする。

考察の対象は、初集20巻および二集9巻である。初集と二集のあいだには序がはさまれているが、記述のされ方から見てこの両者はまったくの別物というものではなく、一貫した筋をもつものとして認められる。活字になった二集、つまり『天津日日新聞』に発表されたのが何巻あるのかははっきりしない。劉大紳によると14巻まで書かれていたらしい¹⁾が、現在見ることができるのは9巻までであり、未完である。『老残遊記』には初集・二集のほかに外編の残稿がある。外編はまったく別の構想で新たに書き始められたものであるから本稿では論及しない。

1 観察者としての老残

小説において、空間・時間・人物はそれぞれお互いに関連をもたせられながら作者によって設定される。『老残遊記』についても、語られる場所・時間・人物、等に作者の分身と考えられる老残がどのような人間として設定されて

1) 劉大紳「關於《老残遊記》」魏紹昌編『老残遊記資料』（中華書局1962采華書林影印 以下『資料』と略す）所収、58頁。

いるのか、また老残がどのような行動をするのか、これらを分析することによって『老残遊記』の世界がおのずと浮び上がってくる。

『老残遊記』の舞台は、おおまかにいって三つの部分にわかれる。

- 1 済南府から始まり、黄河流域の町々をへて済南府にもどってゆく部分（巻1～20）。
- 2 山東省泰山を舞台とする部分（二集巻1～6）。
- 3 江蘇省淮安の部分（二集巻7～9）。

江蘇省淮安の個所はその内容が冥府のことであり、『老残遊記』は実質的にはその舞台を山東省に設定されていると考えてよい。

春、老残が山東の昔の千乗（今の高苑県）にやってきて、富豪黄瑞和の病気を治療することから『老残遊記』は始まる。老残の旅が開始されるのは、黄瑞和の病勢がたいしたことがないと確認された秋分も過ぎてからのことだ。記述の通りに日を追ってゆくと、巻20では11月末に、二集巻1～6は4日間巻7～9は冥府での話で、日数は不明だが、夢で入冥することになっているから1日、おおよそ2ヶ月あまりの紀行で2年間にまたがらない。

老残の年齢が30歳あまりであること、舞台が山東であること、莊宮保²⁾（張勳果）と会っていること、黄河治水に関することが多く書かれていること、柳家の蔵書（楊氏海源閣）を訪ねて見ることができなかったこと等を蔣逸雪「劉鉄雲年譜」（『老残遊記資料』所収）に照らしてみると、年代は1891年に設定されていることがわかる。巻12巻から14巻にかけては翠花と翠環、また彼女たちが語る黄河氾濫の様子が軸になっている部分だが、ここで翠環の身の上が話され彼女が身を売ることになった原因が2年前の黄河の氾濫であるとされる。その氾濫が己丑の年（1889）³⁾の事だという説明があるところから見ても、『老残遊記』の年代が1891年というのは確かなところであろう。

2) 私は人民文学出版社版『老残遊記』の人名の校訂について、張宮保は莊宮保で統一すべきではないかと疑問を提出しておいた（『『老残遊記』の版本と修改について』『大阪経大論集』第109・110号）。天津日日新聞版『老残遊記二集』巻5に一ヶ所莊宮保としてあるところから見ても、莊で統一しなければならぬことがわかる。

3) 岡崎俊夫の訳（生活社1941）以来、この「己丑の年」は1829年とされて来ており、立間祥介氏、飯塚朗氏によってもその誤まりは踏襲されている。Harold Shadick 訳 “The Travels of Lao Ts'an” は正しく1889年とする。

初集は洪都百鍊生、二集は鴻都百鍊生の筆名で発表された。この洪（鴻）都百鍊生が劉鉄雲であることを指摘し、あわせて羅振玉のいわゆる「劉鉄雲伝」を最初に公表したのは胡適であった。⁴⁾ 劉鉄雲が丹徒の人、淮安に滞在したこと、医術を学んで上海に遊んだことがあること等は、老残が江南の人、故郷が江南徐州（江蘇丹徒県）、串鈴をふって病をなおして江湖をかけめぐって20年近くの経歴があることと一致するし、何よりも治河に関する主張が劉鉄雲と老残はまったく同じである。ゆえに老残は劉鉄雲の分身なのだと胡適はいう。胡適のあげた類似点以外にさらにつけ加えるならば、本文で老残が「鉄二哥」（巻7）「二舅舅」「鉄二老爺」（二集巻7）「鉄二哥哥」「二哥哥」（二集巻8）「二哥」（二集巻9）と呼ばれていることに注目してもよい。「二哥」とは第2番目の兄のことをいうのだが、劉鉄雲が次男であることと考えあわせるならば、劉鉄雲は老残であるという胡適の指摘は正しい。

しかし、問題なのはむしろこれからののだ。老残は『老残遊記』において何を行ない、何を行なわなかったか。換言すれば、作者劉鉄雲は彼の分身である老残に何をさせ、何をさせなかったのか、それが問題だ。突出させて描いた部分と隠蔽した部分の落差を見つめることは、とりもなおさず作者の創作意識をさぐることになる。劉鉄雲の生涯に照らして老残の行動を検討する所似である。

初集・二集全29巻を内容によってまとめると左ようになる。

初集	巻1	寓話	巻1の寓話は、毎年の黄河の氾濫を黄
	巻2～7	遊歴	瑞和という人物の奇病にたとえ、それを
	巻8～11	山中問答	老残が治療するというもの。また当時の
	巻12～14	黄河	中国を風波にもまれる帆船に仮託する話。
	巻15～20	探偵譚	
二集	巻1～6	尼寺の逸雲	巻2～7にまとめた遊歴には、済南府見
	巻7～9	入冥譚	物、黒妞白妞の「説鼓書」見物のほか玉

賢の酷吏ぶり、老残の官僚観等を含む。巻8～11の山中問答では、黄竜子・瑛姑といった不思議な人物との会話、『老残遊記』批判の根拠とされる「北

4) 胡適「五十年来中国之文学」1922.3『胡適文存』2集巻2（上海亞東図書館1924.11）。より詳しくは「老残遊記序」1925.11.7『老残遊記』（上海亞東図書館1925.12）所収。

拳南革」が問題となる。巻12～14は黄河の氷結と翠花・翠環の語る黄河氾濫の様子が中心となり、巻15～20の探偵譚とは、13名もの人間が殺された「毒入り月餅殺人事件」を老残の活躍で解決するという物語である。二集巻1～6は逸雲の語る女性恋愛心理と、彼女の悟りに至る過程が話題となり巻7～9は典型的な入冥譚である。

『老残遊記』という題名が示しているように、老残が行くさきざきで見聞した事柄を順を追って記述するという方法がとられている。済南府大明湖見物、「説鼓書」見物（巻2）、趵突泉・金線泉等の見物、玉賢のうわさを聞いて（巻3）、それをたしかめに行く（巻4～6）、黄河の氷結を見る（巻12）、黄河の氾濫の様子を聞く（巻13～14）、といった部分を見れば、まさに「遊記」という意味がよくわかるし、風景描写も必然的に多くなるはずである。

老残の遊記である以上、老残という人物を通してすべての出来事が語られるという基本的構造があることに何の不思議もないわけで、事実、前半部分（巻14まで）ではそれが忠実に守られているとあってよいだろう。見る・聞くという行為をする人物、つまり観察者として老残が設定されているということだ。

観察者である老残を最もよく表現している言葉が本文にある。「圈子外の人」（巻13）「方外人」（巻15・19）というのがそれだ。両者ともに老残は宮場と関係のない人物という意味で使われており、日本語の「局外者」にあたる。局外者であるから見聞する事件には直接介入することはなく、一定の距離を保って観察するにとどまっているのだ。

『老残遊記』には二人の「清宮」玉賢と剛弼が登場するが、玉賢についての部分に観察者老残がよりはっきりと読み取れる。

ある日、道台候補のまねく宴会の席上で玉賢のうわさがされる。順番がこぬのにもう曹州府に正式任命されるそうだ。強盗の取締りがうまいからだ。有能な人物だがあまりにも残忍すぎる。おおよそ酷吏の政治というものは外面はよいものだ。などとひとしきり玉賢についての意見が出されるが、同席をする老残はもっぱら聞くという態度を取るのみである（巻3）。うわさに聞く玉賢がどういう人物であるのか実際に確かめようとするのが巻4から巻6

までの話で、まず董家口の宿屋の主人から玉賢のことを聞く。強盗のうらみを買いわなにかかって玉賢に裁かれ無実の罪で殺される于朝棟と二人の息子また妻呉氏の賢婦ぶりを聞いて老残は「玉賢という酷吏はまったく憎い」と始めて感想を吐露する。また、雑貨屋の息子が酒に酔って玉賢の悪口をいいとがめられ立枷で殺される事件、馬村集で宿屋の主人の妹婿が義和団の下っ端の意趣返しにあい玉賢の立枷で命を失う事件、以上三件に共通するのは老残が第三者から事件の詳細を聞く形を取っていることだ。玉賢の場合、玉賢自身は最後まで老残の前に姿を現わさない。第三者が語る事実から自然に玉賢の酷吏ぶりが読者に伝えられる。あくまでも老残という人物を仲介させて間接的に述べるという描写方法は、この場合かえって現実性を獲得している。

では、もう一人の酷吏剛弼の場合はどうであろう。剛弼の関係する「毒入月餅殺人事件」は次のようなものである。

齊東村に賈という老人がおり、彼には二人の息子と娘（賈探春）が一人いた。長男には魏家から嫁をもらっておりすでに10年以上になる。ところが去年の7月長男は流行病にかかり8月半ばに死んでしまった。この事件があったから魏老人は娘を慰めるためしばしば家へ呼びもどすことがあった。

今年の8月13日は長男の一周忌で、12・13・14日の法事をすませると魏老人は娘をつれて節句（8月15日）をしに家へ帰ったが、驚いたことにその日の午後賈老人をはじめ13名の人々が死んだという。死因は殺傷でも服毒でもない。そうこうするうちに賈探春らは嫂の賈魏氏が男と通じて毒を盛ったと訴えた。賈老人の食べ残した月餅にはヒソが発見されたが、自分でも検視を行なった王子謹が考えるに死因は中毒ではない、どうもおかしい。派遣されて来た剛弼はただちに魏老人と娘の賈魏氏を拷問にかけ自白を強要した。一方魏老人の忠実な家僕が主人を助けたいのあまりに、町の名士胡挙人を仲介し剛弼にワイロを贈った。剛弼は法廷で、無実ならばなぜワイロを贈る必要があるのか、それをためらいもせず一人の命を五百両と計算したのは犯人である証拠であると述べ、拷問に耐え切れなくなった賈魏氏はついに虚偽の自白をする。この結果に納得のいかない王子謹たちは、白子寿に来審を請うため、老残に莊宮保あて手紙を書くよう依頼する。

事件の大概を黄人瑞という第三者が語るのは玉賢の場合と同じである。異なる点は、毒入り月餅殺人事件の方は審理が進行中であることだ。

白子寿のあざやかな裁判でヒソは後に入れられたものと判明し、事件解決のため請われて調査をすることになった老残は、毒薬の出所を明らかにしようとして西洋医学化学に通じている天主堂の神父を訪ねるが、毒薬の正体は判明しない。あるいきさつで賈探春と好い仲の呉二浪子が犯人であることを知り、用人許亮を呉二浪子に近づけ、毒物というのは「千日酔」という薬草であること、青竜子という人物が生きかえらせる薬草を持っているとの情報を得た。最後に青竜子を訪問し「返魂香」を入手した老残が、13名を生きかえらせて事件は終る。

玉賢の残虐さを当事者に近い人物から聞くという観察者の立場にあった老残が、剛弼の場合は裁判中の堂上で直接剛弼と対決したり（巻16終り～巻17始め）、シャーロック・ホームズもどきに探偵の役割をはたすという当事者の立場へ移行している。

「毒入り月餅殺人事件」は探偵物語としてそれなりに読ませる工夫がなされているが、「千日酔」「返魂香」に至っては常識的に考えて人を納得させるものではない。老残の観察者から当事者への移行に歩調をあわせて、内容的に現実性を喪失して行っていることに注目する必要があるだろう。

2 現実から幻想へ

「毒入り月餅殺人事件」の不可解な点は「千日酔」「返魂香」ばかりではない。

原告の賈幹が白子寿の「死人を納棺した時、顔色はどうであった」という問いに答えて、「真っ白で死人同様でした（原文：白支支的，同死人一樣）」（巻18）といているが、死人を指して「死人同様でした」とはどういうことか。最後には13名全員を生きかえらせるための伏線と考えられぬこともないが、奇妙なせりふだ。

堂上の裁判の場であやうく拷問にかけられるところだった賈魏氏は老残に救われるのだが（巻16～17）、彼女の実家で老残に傷を治療してもらいなが

ら彼であることに気がついていない。

賈家の13名が謀殺されたのが8月15日であり、老残が「返魂香」を焚いて生きかえらせるのが計算していくと11月中旬になる。この3ヶ月間死体が何ともないというのが何よりも理解できない。

この事件は非現実的な点を多く持ち、内容的にも物語性が強くうち出されており、巻14以前と傾向を異にする。それゆえ中国においても巻15以後は他人の偽作ではないかと言われたことがあり⁵⁾、劉大紳によって否定されている。⁶⁾ わざわざ劉大紳が否定しなければならなかったことから、内容の質的变化が誰の目にも明らかだったことがわかるのだ。

超現実的傾向は、泰山尼寺の逸雲、冥府見物と二集にも依然として、あるいは色彩をより強くして引き継がれる。『老残遊記』は巻14を境として大きく前後のふたつの部分に分かれ、現実性の濃い内容から幻想性の濃厚なものへと変化しているといえる。巻14を分岐点とすることと、劉鉄雲の執筆の経過がまったく一致することは過去に指摘したことがある。

この現実から幻想への移行をもう少しはっきりしたかたちで明らかにしておきたい。

老残という人物を通じてすべてを描写して行く方法を劉鉄雲がとっていることはすでに述べた。基本的には作者の視点は老残に固定されているといっってよい。ゆえに、老残の心理描写を行なうにあたって、「心裏想道（心の中で次のように思った）」あるいはこれに類する「想」「心裏詫異道」「想起」「想道」「心裏想着」等の言葉が煩雑と思われるほどいちいち用いられている。視点を老残に固定している以上、老残以外の人物の心理を直接的に描写することは統一をくずすことになるし、また事実、巻14以前にはわずか1例（巻13に翠環の場合）しかもごく簡単なものがあるにすぎない。しかし、巻17では翠環の心中の苦悩を、二集巻2では徳夫人が逸雲のすばらしい人物であることを心の中で思い、二集巻3から巻4にかけての逸雲の独白は彼女自身の心理を述べたものであるというように、老残を経由せず作者が直接その人物

5) 趙景深「老残遊記及其二集」『新小説』第2巻第1号1935.7.15。

6) 劉大紳「関於《老残遊記》」二著作《老残遊記》之源委注九『資料』60頁。

の心理を描写することが目立って多くなっている。作者の視点の複眼化がうかがわれるし、また作者の老残ばなれは心理描写のみにとどまらない。

『老残遊記』で老残の登場しない部分があることに注目してみよう。

老残が登場しないで重要な意味を持つ部分は巻8～11の「山中問答」の箇所であるが、ここでは老残に代わって申子平が配置され老残の役割をはたしているから、表面的には老残は見えないが実質的にはそれ以前の部分と構造は変わらない。だが、初集では白子寿の再審判の場（巻18）、呉二浪子に近づいた許亮が賭博に負け「千日酔」のことを聞き出す場（巻19～20）および二集の逸雲が環翠・徳夫人に物語る場（巻3～5）と相当の部分が、老残と関係のないところで進行している。このことは明らかに老残のみを通して描くことができなくなったという創作手法上の破綻を意味している。そうならざるを得なかったのには、内容の質的变化つまり現実（遊記）から幻想（物語）への変化が原因なのである。

3 幻想の意味するもの

『老残遊記』の幻想的な部分を順にあげると、初集では「山中問答」（巻8～11）、「探偵譚」（巻15～20）、二集の「尼寺の逸雲」および「入冥譚」である。

「山中問答」は、ここでは仮に「問答」としたが、其實、申子平はもっぱら瑣姑・黄竜子の聞き役にまわっており、反駁らしきこともせず、その意味において作者の思想が瑣姑・黄竜子の口を通して直接述べられていると考えざるを得ない。

要点は瑣姑が語る儒仏道三教一致の説（巻9）と黄竜子の語る「北拳南革」から宇宙の構造の部分（巻11）である。

儒仏道三教一致とは、人に善をなすようにさせ、公のためにつくさせる点で三教が一致しているというものだが、ここからすぐ思いあたるのは劉鉄雲の太谷学派の思想である。

「毒入り月餅殺人事件」にしても剛弼の酷吏ぶりを描くためだけであった

ならば、最後に死人が生きかえるというまことに不可解な結末にする必要はまったくないはずだ。だが、「千日酔」「返魂香」という西洋医学化学でも判明しないような薬物を出したのも究極的にはそれを製造した青竜子という不可思議な人物を登場させるためではなかったか。黄竜子・青竜子、二集巻5では赤竜子と同類の名前が表われるが、これらにはすべてモデルが用意されているのだ。黄竜子は黄婦群を、青竜子は蔣竜溪を、赤竜子は劉鉄雲自身のことをいっており⁷⁾、三名ともに周太谷（二集巻1の周耳先生）を学祖とする太谷学派の弟子なのである。

逸雲の場合、二集巻5で徳夫人に仏法を説き、男女の区別を超越した悟りの境地に至るまでの変化を語る。

12・3歳の時は男も女も何もわからなかった。14・5歳になって天津の泥人形のようなのや、芝居の女形のような美男子が好きになり、16・7歳で内に文雅・英武のある人でなくてはと思い、17・8歳になると才子英雄を愛するようになった。新聞社で論説を書く人、留学生、戦争で観戦に行ったり、志願して敵前に赴いたり、海に投身自殺したり、鉄砲で人を殺しその上自殺する人が真の英雄だと思った。しかし、よく考えると曾文正・曾忠襄を除いてはそんな人は英雄ではないことがわかった。18・9歳になると曾兄弟でもなお足りない、諸葛武侯ではじめて才子であり、関公・趙雲ではじめて英雄といえる。またさらに後には、管仲・楽毅が英雄で莊周・列禦寇が才子だと思った。そうしてゆきつくところ、ただ孔聖人、李老君、釈迦牟尼のみが大才子大英といえる。

「一日のひまな時は、儒釈道三教の聖人と遊ぶ」という言葉からもわかるように、「仏法」とはいいながら最終的には儒仏道の三教一致に到着しているわけだ。

さて、残る二集巻7～9の入冥譚である。

入冥譚には、「ある人が夢の中で、あるいは一旦死んで冥府に拘引され、幸に無罪放免になる。ついでに地獄を案内されたのちに蘇生し、その見聞を

7) 劉大紳「關於《老殘遊記》」三《老殘遊記》之影射『資料』64頁。

世人に語って勸善戒悪の資とする」⁸⁾ という型があるという。老残の場合も、夢に閻羅王からの使者が訪れ、閻羅王の査問を経て現世に帰ることになるがその前に冥府見物を行なうというように一般にいう入冥譚の型を踏襲する。ただ、『老残遊記』では二集巻9で物語が終了しておらず、突然老残の身体に檀香の香を生じ、これは西方極楽世界へ行くしるしだ、となっているところからも巻10以後もなお夢が継続しているらしい。

入冥譚が基本的に仏教を背景にしているからには、何もわざわざ「仏経上ではこれこれという」などと注釈する必要はない。だが、老残の場合、「地獄で悪鬼を処罰する役人をすべて阿旁とよぶ。これは仏経上の名詞であり……」（二集巻8 傍点引用者）という説明があるかと思えば、閻羅王自身が「口過（註：失言）」ほどの大罪はないこと、同時に言語には功德もあり「口徳」と相殺され、四句偈を受持（教えを受け心に入れ、忘れずに覚えておく）し他人にそれを説けばこれほどの福德はなく、これは仏経上の話である、というように言っている。また、同じ個所で、「もし人が儒経、道経において受持奉行し、他人のために説けば、その福德も同じなのである」とあるが、仏経と並列させて儒経・道経をあげている点、しかも閻羅王自身が述べている点においてその意味は小さくない。冥府という設定自体が仏教の影響であるにしても、その中身はやはり儒仏道三教一致なのである。

4 劉鉄雲の思想

『老残遊記』の幻想的な部分が多かれ少なかれ太谷学派の思想と結びついていることを見てきた。では太谷学派の思想とはどういうものか、特に当時の中国社会をどのようなものとしてとらえていたのか、『老残遊記』そのものを読むことによってそれを探ってみよう。

掘るところは巻11の「山中問答」である。この部分は『老残遊記』を論じたものならば必ずといっていいほど言及されるが、しかし、表面的な語句のあげつらいにのみ終始し、それも性急に現在の政治的基準をおしあてて判断

8) 澤田瑞穂『地獄変』法蔵館1968 81頁。

が下されるという状態である。「北拳南革」をもって作者劉鉄雲の反動性がうんぬんされて来たことを見ればそのことが理解できよう。劉鉄雲の思想の中で「北拳南革」を位置づけるといった、全体的な解明はほとんど行なわれていない。唯一の例外は、大村益夫氏の「清末社会小説(下)」(『東洋文学研究』第15号早稲田大学東洋文学会1967)である。大村氏は同論文中の〔七〕劉鉄雲の項で〈哲学問答〉と題し、劉鉄雲の思想にふれておられる。私は基本的に大村氏の考え方に賛成するものだが、ここでは私なりの整理をしておきたい。

本文を読む限り、原理的にはそれほど複雑ではない。

勢力尊者の化身として上帝と阿修羅があり、それぞれ平等の関係で対立している。阿修羅は数年に一度上帝と戦い、最後に阿修羅は敗れるが数年たつとまた戦いをいどんでくる。上帝は阿修羅を滅ぼすことも降伏させることもできず、両者は同等に力を持ちながら勢力尊者の支配下にあるという。上帝・阿修羅ともに勢力尊者の化身であるからには、両者の争いで勢力尊者の存在そのものがそこなわれることは絶対ないわけだ。上帝と阿修羅が対立すること自体が調和することであって、大村氏の用語を使うならば「大同調和」の世界観である。

上帝と阿修羅の戦いによって、この世の出来事はすべて説明され、対立物

勢力尊者……………無極		はどちらかの陣営にわけられる。〔左図参照〕
阿修羅 ←—————→ 上帝……………太極		
秋冬(肅殺)	春夏(生氣)	三元甲子はまったくのこじ
霜雪寒風	天の好生の徳	つけでいろいろとつじつまの
妖魔鬼怪(私利)	聖賢仙仏(公利)	あわぬところがあるが ⁹⁾ 、甲
北拳南革		

9) 劉大紳「関於《老残遊記》四《老残遊記》中之疑問(『資料』69~71頁)によると、三元甲子には開元甲子(上元)、分差甲子(中元)、転関甲子(下元)があるという。巻11で黄龍子が同治三年甲子を「上元甲子の第一年」としているが、同時に「転関甲子」ともいっているところから「下元甲子の第一年」としななければならない。『この甲子は前の三つの甲子とは異なり、『転関甲子』という』とあるが、三元甲子なのだから「三つ」ではなく「二つ」でいいのではないか。また同治十三年甲戌を第一変とし、数えて甲寅を第五変とするが、転関甲子が同治三年甲子から始まるならばなぜこの甲子を第一変としないのか。「もし咸豊甲寅に生まれた人は、八十歳まで生きるとすれば、この六甲の変化をみな身をもって経験する……」の傍点箇所は、多くとも七十歳ですべての変化を経験することができる。

戌（同治十三年1874）から甲寅（1914）までの五変の後には、すべてが定まるという考え方にも上帝と阿修羅の図式をあてはめることが可能だ。つまり、甲寅を境としてそれ以前を、甲戌（1874）同治帝崩御、甲申（1884）清仏戦争、甲午（1894）日清戦争、甲辰（1904）北拳、甲寅（1914）南革という変動の時としてとらえているところは阿修羅の時期であり、甲寅以後は文明が大いに進み、中国と外国あるいは漢族と満州族の疑いそねみはすべて消滅し、甲子（1924）にいたり自立ができ、その後は欧州の新文明から進み三皇五帝の旧文明に復したたたくまに大同の世に進むというところは上帝の時期である。

さて、問題の「北拳南革」も阿修羅の部下の妖魔鬼怪ということで勢力尊者の範囲内にいるからまったく否定されるわけではなく、当然肯定的な側面をも持つ。すなわち、「このふたつの乱党は、災厄を醸成し文明を開くものだ」と評価され、大同調和のなかに組み込まれている。

大同調和のなかで変革を求める思想は、政治的には改良主義と結びつく。

巻1の風波にもまれる帆船の寓話に劉鉄雲の政治的立場が明確に示されていることは周知の事実である。論者の多くは、帆船を救うために老残が羅針盤を贈る行為に作者の洋務派的立場を認めている。私も、この見方に同意する。ただ、今までほとんど触れられていない個所で大きな意味を持つと思われるところがあることを指摘しておきたい。それは帆船の向かう方向である。

徳慧生・文章伯が大波にもまれる帆船を発見した時、船は非常に危険な状態にあるが、幸いなことに岸に向かって進んで来ていた。帆船はいたる所で破壊されており、数知れぬ乗客は風波を身に受け、濡れて寒く飢え恐れ、その上、水夫が乗客の食料着物を剥いでいる。ところが、「ふと見れば船では数人を殺し、海に投げ込み、舵を転じて東に向かって進み始めた」。

危険な状態にありながらも岸に向かっていた帆船が、また岸を離れさかまく大海に方向を転じているわけだ。劉大紳によれば、この事件は戊戌の政変を暗示しているといっているが、殺された数人を処刑された譚嗣同・林旭・楊銳・劉光弟・楊深秀・康廣仁らと考えれば、たしかにそれがあてはまる。破壊への方向転換が戊戌の政変であるとするならば、その直前のまがりなりにも岸へ向かっていた時期というのは、その方向が劉鉄雲に是認されて描か

れているわけで、そのことの意味は当然、戊戌の変法を含む改良運動の肯定でなければならない。しかし、あくまでも「改良」であって、「私のみるところでは、運転者は決してまちがっていなかった」という言葉からもわかるように、作者の基本的態度は清朝政府擁護なのである。

大同調和という楽天的な思考は劉鉄雲の官僚観にも表われる。老残は、玉賢のやり方は民を追いつめて盗賊にするやり方であり、その原因を「才能がある」→「出世することを急ぐ」→「天理をそこなう」(巻7)ところに求め、玉賢が「酷吏」であることを喝破する。劉鉄雲の理想とする官僚は、ちょうど玉賢を裏返しにしたもので、盗賊をかえて民とする「父母官」(巻7)として、「民を救うのがすなわち君に報ずるゆえんですから」(巻19)というように、「民を救う」という目標がなければならない。具体的には、玉賢に対しては申東造を、剛弼には白子寿というかたちで明確な対比構造がとられており、申東造・白子寿に官の理想像が仮託されている。玉賢・剛弼に代表される酷吏を批判しながらも、最終的には申東造・白子寿という理想的官僚を登場させて事件を解決するというように、個人的な善良さに期待する楽天性が劉鉄雲にはあり、これと大同調和の思想は無縁ではない。

5 劉鉄雲の『老残遊記』——むすびにかえて

巻1の夢物語に見られる清王朝への信頼、申東造・白子寿に具現された真の「清官」に対する期待、巻11の「山中問答」で明らかにされた大同の世への論理的帰結等はすべて劉鉄雲の思想的楽天性を表わしている。

内容からもさることながら、『老残遊記』の年代設定に劉鉄雲の楽天性を私は見る。

『老残遊記』の年代が1891年に設定されていることはさきに述べた。劉鉄雲が1891年山東を特に選び、そこに物語を限定したのはなぜか。

1903年『老残遊記』を執筆するまでの劉鉄雲の経歴は多彩である。そのおもなものをあげると、太谷学派李竜川に師事する(1880)、淮安にタバコ業を営む(1884)、揚州で医者を開業(1885)、上海で石昌書局を設立(1887)、河

南省の黄河治水に身を投じる（1888）、ひきつづき山東で治水に従事（1891）、山東巡撫福潤の推薦を受け総理衙門で知府に任用される（1893）、蘆漢鉄道・津鎮鉄道の建議（1896）、外国資本と結びついて山西鉞山の開発（1897）、上海で市場の経営、八国連合軍が北京を占領した時の難民救済活動（1900）、浙江省の炭鉞・鉄山の開発（1902）と、黄河の治水を除いてはそのほとんどの事業に失敗している。劉鉄雲の経歴の中で唯一の成功例が黄河に関連する部分のみであった事実を見逃すことはできない。『老残遊記』が自伝的な要素を濃く持っているだけに、劉鉄雲が失敗の歴史を書かず、ただひとつ成功の時期のみに焦点をしばって物語を展開していったところに作者の態度が表われていると強く感じないわけにはいかない。彼のどの失敗ひとつを取ってみても、清末社会における劉鉄雲自身の役割、また社会の構造について考えざるを得ない事柄ばかりであったはずで、優に小説一篇が書ける題材であろう。自己の失敗を一貫して冷徹に見つめるという姿勢が劉鉄雲に欠けていた。巻1の風波にもまれる帆船に羅針盤を献上しようとした老残が、「漢奸」と罵られ魚船をこわされ海中に没して行く個所に、わずかに劉鉄雲の自己評価がうかがえるが、その表われ方の微細さを非難するよりも、楽天的な彼にしてはよくそこまで自分をつき放して描けたと、むしろ評価すべきかも知れない。

酷吏を批判したにとどまらず雪の中の小鳥を見て曹州の民に同情する（巻6）などの注目すべき部分があるにしても、『老残遊記』全体を見た場合、現実から幻想への急激な傾斜ひとつを取っても作品それ自体としては成功しているとは思えない。その原因は、劉鉄雲の大同調和の思想にあらかじめ用意されていたと結論せざるを得ない。

（たるもと てるお）